

D-6 児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について(第8報)(b) 出生時の父母の年齢と知能との関係

宮崎大教育 〇秋山露子 芝尾美子

目的 本研究は児童の心身発達の環境条件として出生時の父母の年齢が児童の知能発達とどのような関係にあるかを究明する事を目的とした。

方法 既に報告した資料を基にして児童の父3019名、母3065名、父母の組合せ2979組を対象に児童の出生時の父母の年齢、年齢差及び父母の組合せと児童の各年齢層別に検査された知能偏差値との関係を統計的に処理し、総合的に検討した。母集団の分散の均一性はF検定によって検し、平均の差をt検定した。

結果 平均知能偏差値は父の年齢は30才~34才が最も優れ、35才~39才、25才~29才もかなり優れていたが40才以上は劣っていた。母の年齢は25才~29才が最も優れ、20~24才がそれに次ぎ、30才以上は年齢が進むにつれて平均知能偏差値が低下する傾向が認められ、40才以上は著しかった。父母の年齢差は11才以上が知能偏差値上位が多くなり、下位が少い事が最も優れ、9~10才がそれに次ぎ、母が年上が最も劣っており、年齢差の少ない方がやや劣る傾向が認められた。父母の組合せでは母は25才~29才、父30才~34才が最も知能の優れた児が生まれやすく、この年齢では離婚者の年齢を問わず良い知能を持つ児が出生する可能性がある。又母は20才~34才位までが優秀で、それ以後は劣って行くが父は母の年齢がその範囲内にあれば50才位まであまり劣らないが50才を過ぎると著しく劣る傾向が認められる。以上の結果から概ね女性は20才から30才の初期に子供を産む事が良く、年齢が進むにつれて優秀児を産む可能性が少くなる傾向が認められ、父親は50才以下なら母親が40才以下20代であれば児の出生条件として良好である。